

もっと知りたい

ふるさと

69

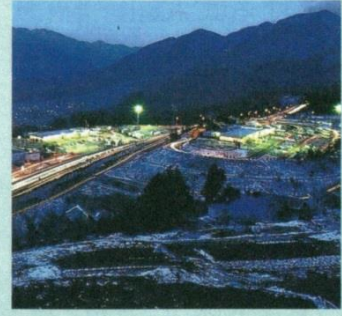
「探し歩記」もし現代の芭蕉が八幡を歩いたら...

松尾芭蕉が更科の里、姨捨の月を観たいと思ひ、信濃路の旅に出たのは、江戸時代の前期、元禄元年(1688)。

門人「越人」を伴ひ、岐阜から木曾路を経て、この地に向かいました。中山道洗馬宿に着いたのは、8月14日。十五夜はもう明日です。中山道からの脇道、善光寺街道で姨捨を目指して、深夜零時すぎ徹夜の覚悟で洗馬宿を出ました。

くしくも、60里の行程を18時間踏破。夕刻には猿ヶ番峠を越え、姨捨での中秋の名月鑑賞することができました。

そこで、現代の芭蕉さんなら、更科の地をどのように歩いたのか、タイムスリップして...



姨捨サービスエリア

姨捨サービスエリアのラーメン

「越人君、あその不夜城のように光輝いているのはなんじや」

「先生、あれは『姨捨サービスエリア』です」

「ああ、もうじき姨捨の月に巡り逢えるんじや。それにしても腹がすいたわい。何か食えんかのう?」

「先生、あそこにフードコートなるものがあり、食堂がありますよ」

「そうか、信州ならやはり更科蕎麦だな」

「先生、蕎麦よりもラーメンが表看板ですよ。地元味噌を使っているそうです」

「なに、みそラーメン?初めて聞く名前だが、食べてみるか」

「先生、うまいですよ。やや甘い味噌味ですが、濃厚な鶏ガラスープとマッチし、喉元を通ると深い味わいです。麺は太めの縮れ麺で、しっかりとスープに絡んでいます」

「ボリュームもあり満足じゃ、次はいよいよ『長楽寺』だな」



長楽寺

長楽寺 佛塚

「越人君、やつと姨捨の月を観ることができたね」

「ええ、感激です。それにしても、『オバステ』なんて、変な名前ですね」

「昔の伝説を知らんのかね。ああ、一句思い浮かんだよ。佛や姥ひとり泣く月の友どうかな」

「すばらしい、月をめぐるばかりか、中秋の寂しさも伝わってきますよ」

大雲寺

「先生、念願の姨捨の月、ついに観ることができましたね」

「さすが、古来からの言い伝えの地、しかと感じることができたよ」

「さて、次は『善光寺』ですか」

「それもそうだが、ゆつくり更科の里を歩くのもいいな」



大雲寺

「先生、ここの田んぼはみんな小さく、そしてかまぼこのような形をしていますね」

「越人君、これこそ田毎の月といわれる棚田なんだよ」

「姨捨から峯を歩いてもうすぐ『桑原宿』ですよ」

「おや、石垣の立派なお寺が見えてきたね」

「参道の入り口に『大雲寺』と案内札がありますよ」

「おお、寺の前の池には蓮が生えているぞ。夏にくればさぞかし見事な風景だな」

「先生、桜もたくさん植

わっていますね」

「そうか、『大雲寺』か。桜も有名と聞いている。いつか、桜の時期にも来てみたいものだな」

芭蕉は、15日に姨捨で月を愛で、翌16日は『善光寺』を訪れ、更科の里(今の真島あたり)で十六夜の月、そして、浅間に向かう途中、坂城で十七夜の月を愛で、江戸に向かうのでした。

さらしなや三よさの月見雲もなし

越人

『更科紀行』からの創作です。

八幡 唐木田恵実子・本山 太い子

(写真 信州千曲観光局)